

## ハリケーン襲来から3ヶ月を経て ~グアテマラからの報告~

2005年12月13日から年末まで、開発と権利のための行動センターの派遣でグアテマラに行ってきました。目的は、ハリケーン災害の現状把握と支援ニーズ調査及びそれに基づく助成金申請書の作成です。今回は特に被害の大きかったサン・マルコス県とソロラ県に絞って訪問しました。

### *Departamento de San Marcos* サン・マルコス県



サン・ペドロ市郊外（左）とサン・ラファエル市（右2枚）の被災地の様子 撮影：石川智子（05.10.28）

サン・マルコス県では、高原部のシビナル市とコミタンシーヨ市、高原をしばらく海岸の平地方面へ下ったエル・ロデオ市に行きました。

シビナル市では土砂崩れにより道路や家、畑が大きな被害を受けており、また山中の尾根筋にはいくつもの大きな亀裂が走っていて、次の雨期にはまた崩れるのは確実と思われます。地質は砂地で、薪を得るための森林伐採や、斜面に作られた道路がより被害を大きくしているように思われました。

コミタンシーヨ市では、私が事務局長をしている「グアテマラ生産者支援ネットワーク“みるば”」（フェアトレード団体）でいつも商品をお願いしている布織りの女性グループを訪ねました。最初はグループの活動など楽しくおしゃべりしていたのですが、あるおばあちゃんが畑が流された話を始め、そのうち泣き出して、みんなも涙しながら自分も、自分もと、状況を話してくれました。ほとんどの人が川沿いの平地に畑を作っており、増水した川によって多くの収穫を失ってしまったとのことでした。それでも、お金や食料をもらうより、自分たちの作ったものをもっとたくさん、もっといい値で買ってもらうことで生活が成り立っていくのだと力強く語ってくれました。みるばとしても、彼女たちの生活が少しでも楽になるように、次の仕入れに向けてがんばりたいと思います。

エル・ロデオ市では、高原部の土砂崩れから派生した土砂と、ものすごい量の水が押し寄せ、両川岸が流されて川幅が数百メートル規模に拡大し、水が引いたあとは巨石がゴロゴロする荒れ地へと変貌していました。もちろん橋という橋は流され、しばらく陸の孤島状態が続いたとのことでした。サン・マルコス県のこの地域はコーヒーの大農園が広がる地域で、農民たちは安価な労働力として奴隷のように働かされ続けています。ハリケーン災害とはまた別に、そういった農園には話では聞いていたものの、初めて訪れました。話してくれた彼らの現状やその風景はもちろんでしたが、労働者の権利を求めて、死の危険も省みず長い間戦ってきた彼らのその顔に浮かぶ濃い疲労の色が、今も目に焼き付いて離れません。



シビナル市山中の亀裂と土砂災害の様子

撮影：栗田桂子(05.12.17)



パナバフ地区の被災直後の様子と被災者の女性 撮影：CONIC (05.10.12~13)

ソロラ県サンティアゴ・アティトラン市は、パナバフ地区が土石流によって壊滅するなど、国内でも最悪の被災地です。避難所トイレの後ろに見えるトリマン火山（標高 3,158m）の山頂に見える茶色の部分が崩壊部で、その土砂がパナバフ地区の中心部（標高 1,562m）に到達、捜索も行われましたが、水分を多量に含み泥状となった土砂が 6~12mの高さにまで堆積、600 人以上が生き埋め・死亡しました。現在でも土砂はそのまま、遺体も埋もれたままになっています。家も見えないくらい土が堆積したので、見た目ではよくわかりませんが、実際には土砂の下にたくさんの家と人が埋まっています。



避難所のトイレとトリマン火山 撮影：栗田桂子(05.12.21)

ここでは、まず仮設住宅の建ち並ぶ避難所を訪れました。厚めのビニールシートで作られた粗末な仮設住宅では、シートを切って強盗が押し入るなど安全面の不安や、せまい面積に大人数が暮らさなければならぬなど、状況は決してよくありませんでした。それでもまだ仮設住宅に入れた人は良い方で、多くの家族が今も学校などの施設で避難生活を送っているとのことでした。

こうした家を失って避難所暮らしをしている人の他に、家は無事だったが畑がやられてしまったという家族も多く、また、一時避難している間に家財道具一切を盗まれてしまった人もたくさんいます。こうした家が無事だった人たちには、支援の手がまったく届いておらず、未だに一体どれだけの人がどんな被害を受けたのかという調査すらなされていません。自分の食べるものをなんとか小さい畑で栽培して食いつないできた貧しい人々にとって、畑の収穫がないということは、イコール死につながります。



避難所で暮らすマリアさんと  
泥の中から掘り出した織機  
撮影：栗田桂子(05.12.21)



避難所の食事準備風景  
撮影：CONIC (05.10.13)



仮設住宅の建ち並ぶ避難所  
撮影：栗田桂子(05.12.21)

パナバフの今も何百人もの人が埋まったままの土砂の上を歩き、切なくて言葉もありませんでしたが、今はこの生きている人たちがいかにこれから生きていくのかを、私たちも真剣に考えなければいけないと強く思いました。信じられない苦難の道を、絶望せずに希望を見いだして歩いてきた彼らが、この苦境の中も強く生き抜いていってくれるだろうことを信じて、日本からできること、しなければいけないことを、私もひとつずつ重ねていきたいと思います。